

毎年、旅行がてらに神戸に住んでいる娘一家に会いに行くのを楽しみにしていたのですが、先だって夫くんの転勤で外国へ移住してしまつたので、残念なことにはこれからはそれもできなくなってしまいました。地理的にはそう離れてはいませんが、今までのようにちょいと車で、と言うわけにはいかなかったのです。

特に、この六年間は孫娘に会えるのが待ち遠しくなりませんでした。大袈裟に聞こえるかもしれませんが、孫は一人しかいないのでポツカリと心に穴が開いてしまつたような虚しい気分です。きつと妻も同じ心境に違いありません。

そもそも私たち夫婦が年に数回の神戸通いをするようになったのは、今から十八年前に娘が神戸近辺の大学へ通うことになつたのがきっかけでした。それから二年後に息子も同じ地域の大学へ入学することになり、島根のお土産や日用品などを持って定期的に二人の様子伺いに行くのが恒例となつたのです。高速道路を利用すれば車で片道四時間ほどなので、苦になる距離ではありません。

娘は片付け上手のキレイ好きなので何の心配も無かつたのですが、息子のほうは野郎独り暮らしのご多分に漏れず、散らかし放題の部屋の整理やデロデ

ロになつた風呂場などの水周りの掃除をするのも目的のひとつでした。その後、息子は地元に戻りましたが、娘はそのまま残つて就職して同じ会社の人と結婚し、子どもを授かり神戸市内に一家で住んでいたのです。

コロナ禍の一時期を除いて、十八年に渡り毎年あれこれ準備をして子ども達に会いに神戸まで車走らせることは生活の一部になっていました。普段は城下町の狭くて入り組んだ道路しか車を運転する機会のない田舎物にとつて、神戸市内の広大な五車線道路を走行することは新鮮な感覚に溢れていました。彼の地のドライバーの運転マナーは悪くなくて今まで怖い思いをしたことは一度もありません。市内には人気スポットも数多くあり、限られた時間の中で観光も楽しみました。そんな神戸の街は私たちにとつてかけがえのない思い出の地となつたのです。

過日、連休を利用して海外に旅立つ前の娘一家に会いに行きました。孫娘が種を蒔き発芽させた『ペコちゃん』と名付けられたオジギソウがあつたのですが、移住先には持つて行けないので我が家を持ち帰ることになりました。毎朝水をあげて日当たりの良い窓辺に出して成長を見守っています。では、皆さんお達者で。

## 老い老いに 木幡智恵美

6

週一回という無謀な宣言をして始めた「夕焼け通信」。何とか一年続けることができ、部数も三十部から八十部に増えた。そんな時、発起人であるNさんと編集長が転勤となる。そこで、夕焼け通信の拠点は編集長の転勤先の隠岐へ移ることになった。それを機に、夕焼け通信社と名を改め、発祥の地秋鹿を松江支社とし、さらに瑞穂町には石見支社ができた。その少し前、編集長はパソコン通信を始めており、原稿のやり取りや編集した通信のやり取りがパソコン上でできるようになっていた。本社でも支社でも同じスタイルの夕焼け通信が印刷できるので、松江支社では、パソコン音痴の私にそのような芸当ができるはずはなく、同僚のTさんが編集した通信の受け取りや印刷を引き受けてくれることになった。「二年目を迎え、わたしたちは夕焼け通信社を結成しました。夕焼け通信に携わつてくださる人たちは、すべて社員社友です。」と、一九九四年四月四日、第四十二号の編集後記にある。その言葉からすれば、Tさんは松江支社の要の社員である。

夕焼け通信社が複数個所にできたことから、これまでの投稿者に加え、新たな書き手が続々と登場する。編集長との関わりから投稿が始まった茨城のYさんは、折々の思いを綴つてくださった。遠方からの寄稿はパソコン通信ならではのことで。内地留学中に自身の研究テーマに取り組むため秋鹿小学校へ時々来られるようになったMさんは、祖母が病床で認めた記録文を初盆の供養として寄せてくださる。秋鹿小学校の教員Oさんは娘さんの友だちとの関係でイギリスに行かれることになり、その紀行文を連載された。さらに、編集長の先輩で、隠岐の社会福祉法人に勤務のRさんは、その後さまざまな話題で投稿を続けてくださるようになる。

そこに石見支社からや松江支社のTさんから支社便りが加わると、これまでのB四版四段組み一枚(時々裏面にも印刷していた)では紙面が足りなくなつた。そこで、B四版を半分に折つたB五版で三段組み四ページ(多い時には六ページ)へと体裁を変えることになる。第六十三号からのことだ。

30代フリーター 自民党総裁選の結果は安倍時代の終わりを告げるものとして報じられた。

年金生活者 安倍晋三の政権が終わっても、そして彼の生涯が終わっても、安倍時代は続いていた。安倍のカリカチュアと化した高市早苗が「反安倍」の石破茂に敗れたことで、ようやくそれが終わった。ヘーゲルは『歴史哲学講義（下）』（長谷川宏訳）で次のように語っている。

「そもそも国家の大変革というものは、それが二度くりかえされるとき、いわば人びとに正しいものとして公認されるようになるのです。ナポレオンが二度敗北したり、ブルボン家が二度追放されたりしたのも、その例です。最初は単なる偶然ないし可能性とさえ思っていたことが、くりかえされることによって、たしかな現実となるのです」

安倍晋三はコロナ禍のさなか、持病の悪化を理由に退陣した。それがコロナと重なったのは「単なる偶然」に見えた。しかし、憶測を重ねていえば、

かどうかという文脈で総裁選があまり語られなかったのは七不思議のひとつ、といった趣旨の話をしていた。

年金 決選投票で石破に惜敗した高市が「女性だから」とか「女性なのに」といったことを国民にほとんど感じさせない、日本では数少ない女性政治家のひとりであることをそれは物語っている。

高市が事実上、日本の首相の座を争う戦場に立ち、男性である石破と互角に戦うことができたのは、そうした特性が大きく寄与している。ジェンダー平等という観点から見れば、高市は日本の政治史を前進させることに貢献したと言いうことができる。

似たような政治家に小池百合子がいる。彼女は「女性初」を売り物にしてきたかもしれないが、それをしなくても東京都知事に当選できる政治家としての力量を備えていたことが数々の政治行動からうかがえる。7月の都知事選で3位に沈んだ蓮舫はどこかに女性であることをつかえ棒にしているよ

自慢のアベノミクスによっても、悲願の改憲によっても、コロナには太刀打ちできないことを思い知らされ、政権を投げ出したというのが真相だろう。体調の異変はその口実に使われた。

しかし、それで安倍時代が終わったわけではない。終わりはまだ「可能性」に過ぎなかった。アベノミクスも憲法改正も菅義偉、岸田文雄の政権に引き継がれた。当人が演説中に銃弾に倒れた事件は、その意志を遺志に変換し、より強固にした。

30代 それをくつがえしたのが安倍派を中心とした裏金事件だった。大将の遺志を実行に移す実働部隊が武装解除された。

年金 さつき引用したヘーゲルの言葉について、マルクスは次のように書いている。

「ヘーゲルはどこかで、すべての偉大な世界的事実と世界的人物はいわば二度現れる、と述べている。彼はこう付け加えるのを忘れた。一度は偉大な悲劇として、もう一度はみじめな笑

うな一面があるのを感じさせた。小池にはそうしたつかえ棒を必要としない強さがあった。その差が両者のダブルスコア以上の得票差となつてあらわれた。

高市にも同様の強さがあることを総裁選は実証した。ただし、ジェンダーを超越している度合いは小池に及ばない。高市が「女性だから」「女性なの

劇として、と」（『ルイ・ボナパルトのブリュメール一八日』植村邦彦訳）

国民がインフレで困っているのに、それを加速するようなデフレ脱却を唱えるアベノミクスを固守し、国民が警戒するカルトまがいの右派イデオロギーを掲げる高市は「笑劇」の主役となり、本人の意に反して安倍時代にとどめを刺した。

彼女が安倍を自らのよりどころとしたのは、自前のよりどころがないことの証左でもあった。悪く言えば安倍のものまねだ。模倣だから、本人を忠実になぞろうとする。そのあまり、目鼻立ちをくつきりさせることに熱心になる。本人なら状況に応じて修正したりするところを、彼女は逆にとがらせた。靖国神社に行く、と。ものまね芸人がまねる相手の仕草や声を極端化するのに似ている。それが彼女を安倍のカリカチュアにした。

30代 自民党総裁選を中継するワイドショーで、キャスターかコメンテーターが、女性初の総理大臣が誕生する

に」を感じさせないのは、本人の自前の力だけによるのではない。男性優位の政治の世界で、男性優位のイデオロギーをまとうことによつて女性性を消し去り、「擬態」としてジェンダーを超越する戦略に採用していることが要因になっている。選択的夫婦別姓にも女系天皇にも反対しているのがその代表的な例だ。

30代 石破は日米地位協定の改定を主張しているが、「米側は冷ややか」と報じられ、「外交は一貫性と継続性が大事」と外務省幹部の否定的な声も伝えられている（10月2日朝日新聞朝刊）

年金 石破の主張は貫こうとすれば首相の座を失いかねない難題だ。もし彼がそれを実現し、沖縄県民に「これで普天間飛行場の辺野古移設を認めてほしい」と訴えれば、過半数の県民が受け入れるだろう。それほど沖縄は不平等な協定に苦しめられてきた。だが、衆院解散時期でさえ前言を翻すような石破にそれを期待する県民がどれだけいるか。

ニュース日記 940  
中村 礼治

## 安倍時代の終わり